

Régine Deforges 101, avenue Henri-Martin

青い自転車②

アンリ・マルタン通り101番地

レジーヌ・デフォルジュ 青木真紀子訳

1942-1944



G・R・O

Régine Deforoes 101, avenue Henri-Martin

青い自転車●

アンリ・マルタン通り101番地

レジヌ・デフォルジュ 青木真紀子訳

1942-1944

集英社

青木 真紀子 (あおき まきこ)

1959 年生まれ。国際基督教大学卒業。東京大学大学院博士課程単位取得退学。翻訳家。訳書にジャン・エシュノーズ『われら三人』『マレーシアの冒険』(集英社)。

Série "LA BICYCLETTE BLEUE" 2
101, AVENUE HENRI-MARTIN
by Régine DEFORGES

© Librairie Arthème Fayard, 1993

This book published in Japan by arrangement
with la Librairie Arthème Fayard, Paris
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

アンリ・マルタン通り101番地^{どおばんち}
青い自転車^{あおいじてんしゃ}2
一九九七年十一月三〇日 第一刷発行

著者 レジーヌ・デフォルジュ

訳者 青木真紀子^{あおきまきこ}

装画 佐々木悟郎

装丁 スタジオ・ギブ

発行者 小島民雄

発行所 株式会社 集英社

〒101 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

編集部 (〇三) 三三三〇—六〇九四

電話 販売部 (〇三) 三三三〇—六三九三

制作部 (〇三) 三三三〇—六〇八〇

印刷所 図書印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

©1997 Shueisha Printed in Japan

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の内容の一部または全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

『青い自転車』ストーリー

1 青い自転車

ボルドー、モンチャックの大ブドウ園の次女レア・デルマスは、マルチニーク出身の母イザベル譲りの野性的な美しさと炎のような情熱を秘めた少女。その年の八月の終わり、十七歳になった彼女は、一人の女へ、変身を遂げようとしていた。

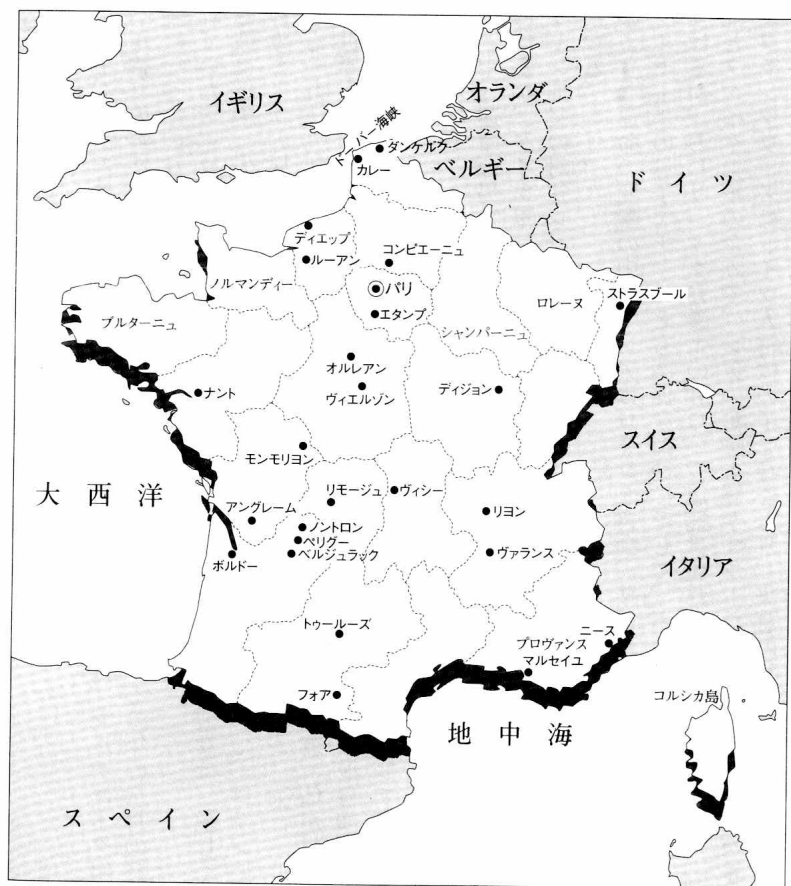
憧れていた青年ロランがいとこのカミーユと婚約、衝撃を受けた彼女は、激しく迫る。しかし彼は拒絶、失意のレアは『謎の男』フランソワと出会う。そして、ロランに復讐するためカミーユの兄クロードと婚約する。

折しも一九三九年九月、ヒトラーのドイツ軍がポーランドに侵攻、英・仏が対独宣戦し、第二次世界大戦が始まる。ロラン、クロードも将校として従軍、クロードは演習中に事故死、レアはカミーユと共にパリに出る。程なくしてパリに戦火が迫り、レア達は脱出するが、古都オルレアンで爆撃を受け、彼女は多くの死を目撃し、又自らを守るため男を銃で撃ち殺す。

そのさ中『運命の男』フランソワと偶然の再会を果たし、結ばれる……。そして彼女は故郷に帰るが、ドイツ軍はボルドーに進み、母は爆撃に遭い死亡。レアは戦火の下、おじアドリヤン神父の対独レジスタンスに関わり、『青い自転車』に乗って極秘の伝言を運ぶようになる。

嵐のような運命の変転の中で、レアはロランと再会、結ばれる。又、幼なじみで醸造所長ファイヤールの息子マチャスとも関係を持つ。そして、ボルドーで警察、ドイツ軍に尋問を受けるが、おじリュック弁護士の手計らいで逮捕は免れる。

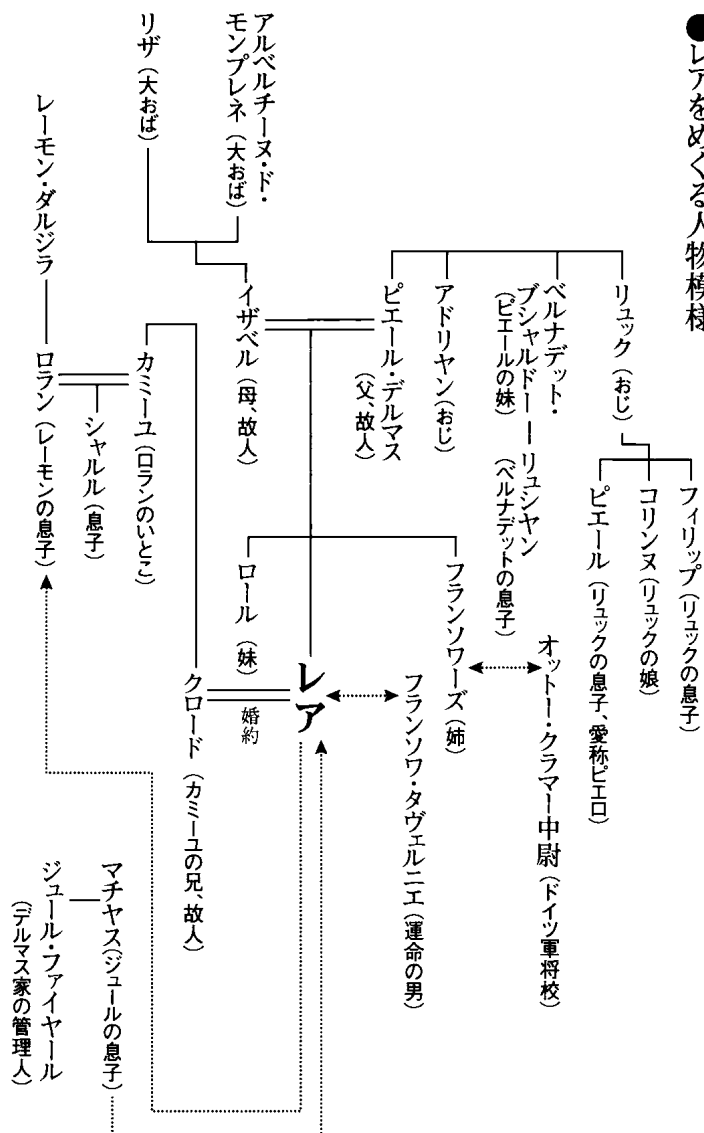
戦乱とファイヤールの企みで、レアの奮闘も届かずブドウ園の経営は悪化、デルマス家の長女フランソワーズはドイツ人将校の子を身ごもり、失意の父ピエールは死去する……。



ボルドーとモンチャック周辺



●レアをめぐる人物模様



【主な登場人物】

レア

本書の主人公。ピエール&イザベル・デルマス夫妻の次女。母親譲りの野性的な美しさと、炎のような愛の情熱を秘めた少女。フランス・ポルドー、第二次大戦の始まりとともに嵐のような女の人生を生きる。

ピエール・デルマス

ポルドーのモンチャックの大地主。代々のブドウ園を継ぎ、拡大させ、高級ワインを醸造。四二年死去。

イザベル

ピエールの妻。マルチニークの名家モンブレネ家出身。母親はクレオール的美女。十歳まで島で育った後パリに出る。四〇年死去。

フランソワーズ

ピエールとイザベルの長女。

ロール

ピエールとイザベルの三女。

アルベルチース・ド・モンブレネ

イザベルのおば。レアの大おば。

リザ

イザベルのおば。レアの大おば。

レーモン・タルジラ

ピエールの友人。サン・テミリヨン近くに住む裕福な地主。

ロラン

レーモンの息子。フランス軍中尉。

カミーユ

ロランのいとこで、妻となる。

シャルル

ロランとカミーユの長男。

クロード

カミーユの兄。ロランとカミーユに復讐するため、レアが婚約する。三九年死去。

リュック・デルマス

ピエールの兄。ポルドーの著名な弁護士、保守派。

ベルナデット・ブシャルドー

ピエールの妹。大佐未亡人。

アドリヤン・デルマス

ピエールの弟。ドミニコ会神父。高名な説教師として世界を回り、独レジスタンスに加わる。

フランソワ・タヴェルニエ

フランスの内務大臣顧問。政府や軍の極秘の任務にあたる。レアの運命の男。

ジュール・ファイヤール

デルマス家のブドウ園のワイン醸造所長。イザベルの死後、土地の奪取りを企む。

マチャス

ジュールの息子。レアの三歳年上の幼友だち。対独協力者となる。

ジャン・ルフエブル

ヴェルドレのブドウ園主アメリカの息子。レアの幼友だち。

ラウール

ジャンの弟。

リュシヤン

ベルナデットの一人息子。

ピエール

リュック・テルマスの息子。愛称ピエロ。

フィリップ

ピエロの兄。

コリンヌ

ピエロの姉。

ラファエル・マル

ゲイの作家。戦時下、謎の行動をとる。

ザラー・ムルシユティン

ユダヤ人の世界的に有名な指揮者
イスラエル・ラザールの娘。自由地
帯へユダヤ人を逃すレジスタンス組
織に入る。

オットー・クラマー隊長

ボルドーに駐留するドイツ軍将校。

フランソワーズと恋愛関係。

フレデリク・ハンケ隊長

クラマーの同僚のドイツ軍将校。

リュト

イザベルに仕えてきた家庭教師。

シドニー

デルマス家の元料理番の老婆。

エステル

アルベルチースとリザが住むパリの
家の家政婦。

ブランシャール医師

デルマス家の主治医。

ドブレ夫妻

ラ・レオールのレジスタンス支援者。

ポワソン警視

ボルドー警察の幹部。レジスタンス
の取り締まりにあたる。

ドーゼ

ボルドー駐留のナチス親衛隊隊長。

クリスチャン・マンジュイ

パリのゲシュタポ。表の顔は「フラン
ス通商サービス」社長。

モーリス・フィオー

ボルドーのフランス民兵団団員。対
独協力派。

マルセル&マルト・アンドリュ夫妻

フランソワの知人。パリで無認可の
レストランを開く。

グラン・クレマン

ボルドーの保険会社社長。レジスタ
ンスの一員。

アルベール

サン・マケールの肉屋。レジスタンス
活動家。

作者は次の方々のご協力に謝辞を捧げたい。ほとんどの場合、意図せずにご協力いただいたものであるが。ポール・アラール、アンリ・アムルー、ピエール・ブカン、M. R. ボルド、リシャール・シャボン、コレット、E. H. クックリッジ、ジャン・ルイ・クレミュ、ブリラック、ジャック・ドビュ、ブリデル、ジャック・ドラリュ、ジャック・デルペリエ・ド・バイヤック、ダヴィッド・ディヤマン、クロード・ドウクルー、ジョルジュ・ト・エルゲ、ジャッキ・フレイ、アンリ・フレネー、ジャン・ガルチエ、ボウシエール、アシス・ジル、リシャール・グロスマン、ジャン・ゲネゴー、ジョルジュ・ガングワン、フィリップ・アンリオ、ジョセフ・ケッセル、ジャン・ラフルカード、クロード・モリーヤック、フランソワ・モリーヤック、アンリ・ミシエル、ジャン・ムーラン、ロペール・O. パクストン、ジル・ペロー、エリック・ピケ、ヴィクス、エドアルド・ポミアヌ、レミ大佐、モリス・ザックス、ジョルジュ・サドウール、レジヌ・ド・ポシモーヌ・サヴァリオ、ミシエル・スリティンスキー、リュシヤン・ステンペール、ジュヌヴィエーヴ・チュル、ピエール・ユトー、ピエール・ヴェイユテ、ドミニク・ヴェネール、ピエール・ヴィアゼムスキー。

アンリ・マルタン通り101番地

わが娘、
カミューに

プロローグ

一九四二年の九月二十日から二十一日の夜にかけて、それまでの酷暑が一変して雨となった。季節はずれの冷たい風がジロンド川の河口に吹きつけ、ガロンヌ川を遡ってきた。

時には雹を伴うほどの激しい嵐が襲い、ブドウ園で働く人々は夏じゅう気を揉んだ。冴えない年度が始まりそうなき配だった。

サン・タンドレ大聖堂の鐘楼が四時を告げた。

ル・ア城塞の独房では、プロスペル・ギルーと息子のジャンがノックの音で目を覚ました。二人は暗闇の中で順番に用を足して粗末なマットに起き直り、光が射すのと、コーヒー代わりの色付き水四分の一リットルとを待った。ジ

ャンはブデ兵舎に收容されている妻のイヴェットのことを考えていた。トールにある彼のヴィオレット農場にゲシュタポと警察が突如踏み込んできた七月のあの日の午前五時以来、妻の消息は知れなかった。彼は両親の逮捕、そしてアルベールとエリザベットのデュペロン夫妻の逮捕を思い出した。夫妻はボルドーの義勇遊撃隊のために武器を受け取りにやって来た、共産党員だった。

家具職人ガブリエル・フルローは叫び声を上げて飛び起きた。ポワンソ警視配下の二人の悪党に尋問されて以来、毎晩こうなのだった。やつらは、彼の右手の指をご丁寧に五本とも折ってしまった。彼は口を割らなかった。ここまでは持ちこたえられたのは、オーロールという若い娘に対する恋心あつてのことだった。彼女はサリニエール河岸にあるカドゥー氏経営の家具店へ、ベルガとフルローが配布することになっているピラを定期的に届けにきていた。恋人

まで逮捕されたことは彼も知らなかった。痛めつけられた指を、恐る恐る動かしてみた。

隣の独房では、ルネ・アントワーヌがうなり声を上げながら立ち上がっているところである。十歳になる息子のミシェルが、「お父さん！」と声を張り上げ腕を伸ばしてくる。その姿は母親のエレーヌとともに連行され、ブデ兵舎に連れていかれた時のもので、追い払おうとしても追いつけないのだ。一家はおそらく密告された。その結果、ペーグルの自宅の庭に隠した武器の蓄えがドイツ人に発見されたのだ。

それはルネ・カステラの意見でもあった。彼の両親、弟のガブリエルは七月八日に、彼自身は十四日に逮捕された。二年前から一家でユダヤ人や非合法活動家をかくまい、投獄囚の家族に援助の手を差し伸べていた。ルネ・アントワーヌ同様、彼も家族の消息はわからなかった。

一階の別の独房では、アルベール・デュペロンがまだ二十歳そこそこの娘カミーユ・ペルドリオを励ましていた。そうすることによって、一緒に捕らえられた自分の若妻エリザベトのことを考えずにすむからだった。

アレクサンドル・パトールは、四歳の息子ステファアーヌの目の前で妻のイヴォンヌが受けた虐待を思い出して、拳を握りしめていた。夫婦ともにレジスタンス闘士の彼らは、サン・タンドレ・ド・コニャックにある自宅にいるところを捕まり、まずコニャック、それからル・ア城塞へと連れてこられた。

レーモン・ピエルジュは、自宅に印刷機を隠していたかで、妻のフェリシエンヌと自分を密告した悪党はどこのだといったと思いを巡らせていた。ばあちゃんが坊主の面倒をちゃんと見ていてくれますように！

ランゴンのジャン・ヴィニョーは、親友であるラウールとジャンのルフエール兄弟が恋している娘、かの麗しきレア・デルマスのきびきびした物腰を思い出したことに、我ながら驚いていた。最後に見た時、彼女は髪を風になびかせながら、モンチャックの所有地へと続く道を自転車を漕いでいた。

独房に一室ずつ明かりが灯っていく。囚人たちは目を細め、ゆつくりと起き上がる。

昨晚から、彼らは知っていたのだ。

一晩じゆう風が吹き荒れて、メリニヤック收容所のバラックの扉の下や、隙間だらけの板塀の間から吹き込み、垢まみれの粗末なマットがかるうじてのっかっている、寝心地の悪い金属製ベッドに寝そべる男たちに、いくらかの外氣をもたらしした。午前五時。囚人たちは眠っていないかった。

コニヤックのリュシヤン・ヴァリナは三人の子供のこととりわけ七歳になったばかりで妻のマルゴが甘やかすぎているセルジュ坊やのことを考えていた。ドイツ人たちめ、あんなに乱暴に子供たちをトラックに投げ込むなんて！今あの子たちはどこにいるんだろう？

ガブリエル・カステラは数時間前に抱きしめた父アルベールのことを思っていた。父は少し離れた場所にあるバラックへ移動させられたのだ。老人の頬を伝う涙を思い出すと、耐えがたい気持ちになった。幸いにもその牢には兄であるルネがいた。

ジャン・ラペラードは、ルネ・ド・オリヴェリアともう一人名も知らぬあの若者を見て、心臓が締めつけられる思いだった。若者は恐怖を隠すために、夜、何時間もハーモニカを吹いていた。二人ともまだ子供じゃないか！「べルト、きみはどこにいるんだ？」

「息子に復讐や憎しみの精神を植えつけないでください」とフラン・サンソンは妻に手紙を書いた。

收容所内はいつになく騒然としている。扉が乱暴に開けられ、国防軍のトラックがレーモン・ラボーの目に入っている。彼は冷たく湿った空気に突然包まれた。まだ真つ暗である。守衛の掲げたハリケーンランプが大きな水たまりを照らし出した。ドイツ人たちは扉の正面に自動小銃を据えつけた。ハーモニカの音がやんだ。

昨日から彼らは知っていたのだ。

ドイツ人将校と話をしていたルソー所長の副官が、バラックへと進んだ。

「さあ、名前を呼ばれたら出ることに。皆さんをお待たせしないで急いで。エスパニエ、ジュグール、カステラ、ヌタリ、ポルティエ、ヴァリナ、シャルダン、メイエル、ヴォワニエ、エロワ……」

囚人は一人一人出てくると、兵隊に押されて列を作り、上着の襟を立てて、ベレー帽や烏打ち帽を深くかぶった。

「進んで、トラックに乗って。ジョネ、ブルーヨン、ムニエ、ピュエシュ、ムリア……」

フラン・サンソンが二十二歳らしい身のこなしで、最初

に飛び乗った。

噂が収容所内に流れていた。各兵舎の窓の向こう側には、密かに通知を受けた囚人たちが控えていた。一人、そして二人、十人、さらには百人、千人の囚人が「インターナショナル」を口ずさみ始めた。巨大な轟きが人々の胸を膨らませ、勇気と尊厳を保ったまま去りゆく者たちの方へと響いていった。泥と雨、守衛たちのがなり声、それに恐怖までもが、希望の担い手である素晴らしいメロディーによってかき消されていった。

朝の七時である。ブデ兵舎や、ル・ア城塞や、メリニャック収容所からやって来たトラックが、スージュ街道を走っている。輸送隊が通ると女たちは十字を切り、男たちは姿を現した。軍の収容所の入り口に差しかかり、トラックは速度を落とした。トラックの中にいる囚人たちはそれぞれ考えに耽り、自分たちに武器を向けている四人の兵士を気にする風でもなかった。でこぼこ道に揺られて、囚人たちは互いに体をぶつけ合った。

トラックが停まった。兵士たちは覆いを開け、後部の囲い板を下げて、砂地へ飛び降りた。

「シュネル……、シュネル……、アウスタイゲン……〔ほら……、急いで……、降りるんだ〕」

片隅に集められた捕虜たちは、顔を見合わせながら無意識に人数を数えていた。七十。七十名だった……。昨日以来、七十名の男がこれから死ぬことを知っているのだ。

パリでドイツ人将校一名を標的としたテロがあったのに対して、ナチ親衛隊師団長兼警察長官であるカール・オーベルクト、ヘルムート・クノツヒェンはヴィシー政府に百二十人の人質リストを要求した。コンピエーニュとロマンヴィルの収容所にいる四十六人の囚人が必要な条件を満たした。ボルドーのゲシュタポのヴィルヘルム・ドーゼが足りない人数を補った。

「ガブリエル……！」

「ルネ……！」

カステラ兄弟はお互いの腕に急いで飛び込んだ。二人とも死ぬ時はどちらか一人だったら良かったのにと、あれほど願っていたわけだが……。

太りじしの将校が人質たちの前に立ちはだかり、何かを読み上げた。おそらく判決文だろう。彼らにはどうだったよかった。突然若々しい声がドイツ人の声にかぶさった。

「進め、祖国の子ら……」

「……栄光の日は来りぬ……」

「……我々は圧政に抗いて……」